

# 原爆文学「古典」再読3——大田洋子『屍の街』報告

中野和典

この特集では二〇一五年八月二日(日)の午前にサテライトキヤンパスひろしまで開催したワークショップの成果を報告する。今回は同日に開催したもうひとつのワークショップ「広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」との関わりも考えて、大田洋子『屍の街』をテキストに選んだ。まず司会の中野和典が『屍の街』の受容史を整理し、次に発題者の長野秀樹が『屍の街』における表現技法や時間構成などの視点から問題提起を行い、さらにもう一人の発題者の柳瀬善治が『屍の街』における「空隙」(語りがたぎ)の視点から問題提起を行った上で、参加者全員での討議を行った。

この特集では三人の登壇者の発言記録を当日の発言順に掲載するので、それぞれの詳細はそちらをご覧いただきたい。この報告では全体討論の内容を要約して紹介する。まず話題になったのは、『屍の街』が一九六〇年代にあまり読まれなくなった理由についてである。大田洋子が自らの戦争協力を不問に付したことなどが指摘されていると中野報告にあったが、他にも『屍の街』には被

爆者たちが周囲の非被爆者たちから蔑視される場面や(日本人)を一括りにして批判する記述が繰り返し挿入されているので、これを読むと戦後の日本人までもが怒られているような感覚になってしまうこと、あるいは医師が患者に出た斑点を見て(美しかった)と発言する(26章)など原爆をそのように語ってはいけないう禁言(タブー)を破ってしまったことが、読者が『屍の街』から遠ざかる理由になっているのではないかという質問があった。これに対しては、確かに作者や読者だけではなく、テキストの中にも『屍の街』「離れ」を引き起こす理由を求めていくことは重要であるという応答があった。

次に話題になったのは、『屍の街』の中で繰り返し言及される佐伯綾子についてである。佐伯綾子は語り手「大田洋子」が作家であることを認め、担保してくれる登場人物であるという指摘が長野報告にあったが、軍国主義を批判し合い、民主主義の大切さを語り合う相手である佐伯綾子は、「大田洋子」が渴望していた「民主主義愛」を共有してくれる人物であり、生身の人間という



よりはほとんど隠<sup>メタファー</sup>喩として描かれているのではないかという質問があった。これに対しては、確かに佐伯綾子を「民主主義愛」の隠喩として読むというのは魅力的な読み方だとは思いますが、「大田洋子」が作家であることや軍国主義を批判していたことへの認証を求めていたからこそ佐伯綾子は「実在の人物」として要請されていたという見方もできるのではないかという応答があった。

また、佐伯綾子については「少女小説」との関わりも話題になった。『屍の街』は女性への言及が多いテキストと言えるが、佐伯綾子が「屍の街」原爆手記も、婦人作家の感覚を逞して書かれてあると一種の香りがする（「屍の街」に寄す）（「中国新聞」一九四九・三・六）などと語っていることも合わせて読むと、『屍の街』に描かれる両者の交わりにも「少女小説」の色合い<sup>ニュアンス</sup>が強いことが見えてくる。佐伯綾子が「民主主義愛」の隠喩になっているという解釈ができるのも、女性同士が相手を理想化しながらそこに自分の夢を投影して語るといパターン化された「少女小説」の言説が『屍の街』の中にあるからではないのか、という質問があった。これに対しては、確かに両者の関係には「少女小説」という見方が当てはまるのだと納得した。そのように考えると、佐伯綾子が〈純潔〉（18章）と語られたり、彼女の飼犬がシエパードとして描かれていることも納得できるという応答があった。

次に話題になったのは、『屍の街』に見られる「空隙」についてである。（さまよい）（8・9章）や〈静寂〉（12章）や〈しびれ〉（15章）という形で示される『屍の街』の「空隙」を柳瀬報告では積極的に意味づけていたが、〈心理学者も来なければならなかった〉〈立派な僧侶も来てくれなくてはならなかった〉（27章）と



司会 中野和典

あるという指摘が中野報告の中にあつたが、アメリカの不在という見方ばかりを強調すると、日本とアメリカという二国間の枠組みの中だけでは原爆を語れなくなる危険性があるのではないか、という質問があつた。これに対しては、

語っていることなども見ると、語り手は権威者オソリタイに「空際」を埋めてもらいたいと渴望しているように見える。「空際」を現在から見て再評価することができるというのとは分かるが、語り手自身は「空際」を埋めようとして埋められなかったことに忸怩じくじたるものを感じているのではないか、という質問があつた。これに対しては『屍の街』にも一定の構成員が働いているにもかかわらず「空際」が埋められていないことを、やはり自覚的に「空際」を残した結果として考えたいという応答があつた。

次に話題になったのは、『屍の街』とその後の作品についてである。『屍の街』を『ぼたる』や『夕風の街と人』につなげて考察した柳瀬報告は、大田洋子再評価という意味では興味深いものだが、後の『ぼたる』や『夕風の街と人』に見られるような「空際」とユーモアの緊張関係を果たして『屍の街』にも見いだすことができるのか、という質問があつた。これに対しては、最も殺伐とした作品として読まれている『屍の街』に、残酷なユーモアを読むことができるかというの重要な問題であるが、今回はそこまで踏み込むことができなかったという応答があつた。

次に話題になったのは、『屍の街』と大田洋子との関係についてである。『屍の街』は広島（特に大田



発題 長野秀樹

である。『屍の街』は広島（特に大田洋子が被爆した白島）と不可分のものであり、場所について強烈な印象を残すものであるにもかかわらず、峠三吉や原民喜に比べて大田洋子も『屍の街』も広島の人々に大切にされて来なかつた

確かにアメリカの不在に注目することによって見えなくなってしまうことがあることは自覚せねばならないが、見えてくることもあることもまた確かである。たとえば、長崎の爆心地に建てられている石碑に「原子爆弾落下中心地」(傍点、中野)と、まるで隕石いんせきか何かのように主体を不在にして書かれていることにも現れている通り、原爆を語ることには何らかの圧力が加えられている。アメリカの不在に全ての原因を求めるとは避けねばならないが、原爆の語りに加えられている圧力について考えるときに、その筆頭として問うべきはアメリカとの関係であると言えると思うという応答があつた。

次に話題になったのは、『屍の街』の出版状況についてである。『屍の街』の「完全版」が、一九五〇年五月という朝鮮戦争直前の時期に、冬芽書房という政治色の強い出版社から再刊されているのは何を意味しているのか、そうした歴史的な文脈の中で『屍の街』を位置づけた研究はあるのか、ないとすれば、もっとそのことについて考えた方がよいのではないか、という質問があつた。これに対しては、冬芽書房との関わりから『屍の街』を論じた研究はまだなく、これも今後の課題であるという応答があつた。



発題 柳瀬善治

赤ん坊を連れて避難していることが序盤で語られているが、その後まったく赤ん坊については語られなくなっている。ジェンダーを消し去った『屍の街』が受け入れられないのは、栗原貞子「生ましめんかな」のように母性を強調せ

たように見受けられるが、それはなぜなのか、という質問があった。これに対しては、栗原貞子も大田洋子が評価されないことに憤慨していたが、その栗原はあまりにも強い怒りが込められた大田の言葉が、自らを被害者として語ってゆく広島の大きな流れの中で次第に疎外されていったのではないかと指摘している。これは大田に限られたことではなくて、被害者性を否定したり、アメリカなどの主体を明らかにしたりして原爆を語っていくことに対して、広島には受け入れがたい「文化」があるように見える、という応答があった。また、このような状況は長崎にもあり、永井隆を批判した山田かん、平和祈念像を批判した詩「ひとりごと」や悪漢小説の要素を持った『われなお生きてあり』を書いた福田須磨子が長崎では受け入れられていないところがある。広島と長崎のそれぞれに禁忌や不可触部分が七〇年経っても残っているという応答もあった。

次に話題になったのは、『屍の街』の女性性についてである。

大田洋子は戦前に多くの恋愛小説を書いており、自分が女性作家であることへの意識が強い作家であったにもかかわらず、『屍の街』には佐伯綾子との関わりは書かれていても、その他のところでは性的な要素が捨象されている印象を受ける。たとえば、妹が

ず、女性作家に期待されるようなものを書いていないことにも原因があるのではないか、という質問があった。これに対しては、確かに『屍の街』に性的な要素は少ないと言えるが、後年の『人間檻樓』は性的な要素を採り入れて物語を構成しようとした結果失敗している。失敗の原因についても恋愛のような戦前作品（『流離の岸』など）の主題を原爆の話にそのまま無理に持ち込もうとしたこと——『流離の岸』の深瀬龍吉と千穂の関係をそのまま『人間檻樓』の九鬼康一と敏子の関係に置き換えようとしたこと——によるとすでに先行論によって指摘されている（長岡弘芳「解説」『大田洋子集 第二巻』三一書房、一九八二・八）。大田洋子の「原爆文学」にはどこかぎくしゃくしたところが残っていて、それは安易な物語を避ける身ぶりであったのだろう。大田洋子のジェンダーの問題についてはいろいろな作品を見た上で総合的に考えなければならぬと思う、という応答があった。

次に話題になったのは、『屍の街』とその後の作品との関係についてである。冬芽書房版の『屍の街』の「序」には（いずれの日か私は、不完全な私の手記を償うべく、かならず小説作品を書きたいと思っている）と結ばれているが、これに即して考える限りでは、大田洋子にとって『屍の街』は手記であり、小説はこれから書くということになっている。大田洋子の作品の系列の中で、ここで語られているような展開をはっきり見いだすことができるのか、という質問があった。これに対しては『人間檻樓』が『屍の街』「序」でいつか書きたいと語られていた小説に当たるのだろうかとよく指摘されている。その『人間檻樓』の評価については賛否両論に分かれているが、評価が分かれていることも含めて問

いなおす必要があると思うという応答があった。

最後に話題になったのは、『屍の街』と『ペスト』の関係についてである。『屍の街』と『ペスト』は、どちらも体験した者としていない者との間で言語が通じなくなるという「隔離状態」を描いている点は似ているが、『ペスト』が綿密に作り込まれた寓意小説である点は似ていない。それなのに、なぜ『屍の街』が『ペスト』を連想させるのか、ということ进行分析しなければならぬのに、佐々木基一も花田清輝も中島健蔵も自分の立場に引きつけて印象を語るだけになってしまっている。両作をしっかりと比較することが必要ではないのか、という質問があった。これに対しては、やはり細かな表現にまで踏み込んで比較することが重要であり、今後の課題であるという応答があった。

時間的な制約もあり、今回も十分に議論を尽くしたとは言えないが、全体討論においても意義深い問題が多く提出されたものと信じている。この特集を機会に『屍の街』の再読がさらに活発になることを期待している。